

令和二年度入学試験 AT

京都学園中学校

# 国語的内容

## 注意

- 問題は全部で七ページあります。
- 「試験開始」の合図があるまで問題を開いてはいけません。
- 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
- 質問がある場合は、静かに手をあげ、監督者が来るのを待ってください。
- 「試験終了」の合図があったらすみやかに解答をやめ、以後は監督者の指示にしたがってください。

□ 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

近年、就職が難しい。うかうかしているとはじめから浪人ろうにんのようなことになる。うかうかしてられないと在學生が浮うき足立あしだつ。講義や授業なんかは出ていられないと、会社まわりをはじめ。四年生になってからでは話にならない。三年生になると早々に、授業を放ほうり出して企業きぎょうまわり。それでもいけない、二年生になったらそろそろ動き出さなくては、という気の早いのもふえてきた。それを「就活」という。就職活動を縮めたもので、いまの大学は就活で成り立っている。しかし、大学で就職を正しく指導しているところはすくない。学生はしかとした情報もないまま、企業をまわる。十社、十五社もざらだという。

採用側は買い手市場。おっとり構えていて、しっかりした採用の哲学てうがくをもっているところなどあるわけがない。配属で人事部へまわったような人間がえらそうに採否を決するのだから、就活の学生も苦勞する。しかし、採用側は神様だから、だれもその不用意をあげつらうことなど、昔からなかった。企業、会社側は、石を浮かせ木を沈しずめるようなことをして、四十年後の危機を迎むかえることなど考えることもない。

採用する側も採用される側も経験がない、生活感覚とほが乏しい。人間というものを考えたことがないひとたちだから、お祭りのようになるのは是非ぜひもない。いい社員を採ひったつもり①の企業が、その連中が役員クラスになる頃ころには、会社自体がおかしくなるという例は、決して例外的ではない。

就職希望者は世の中のことをよく知らない。常識的である。空を眺めれば、真昼、頭上の太陽ひがいちばん輝かがやいている。よし、あれをとらえようと思っても不思議ではない。そういう人間が多いから、真昼の太陽希望者がわんささという。たいへんな競争になって多くの失敗者が出る。

太陽をとらえたひとたちは、勝者のようにおごり、いい気になっているから、夕方になると陽が沈むということを考えるものはすくない。沈みかけてからあわてて騒さわいで、沈む陽をまた昇のぼらせることはまず不可能である。

就職戦線で、<sup>②</sup> 真昼の太陽に乗り損ねたのはしかたがない、遊んでいるよりはましだ、というので、日の出前の太陽に身を寄せる。まだ、太陽らしくないから、果たして日の出がやってくるのかもわからないが、それしかなければしかたがない。日の出前の太陽にかける。のんきに構えていれば生きていかれない。がむしやらに働く。そういう社員が多ければ、陽はかならず昇るとは限らないが、すくなくともいまより悪くはなっていないだろう。そこから希望が生まれる。二十年もすると、<sup>③</sup> 午前十時ごろの太陽のようになってくるかもしれない。そういう会社に入ったひとが人生の成功者である。

私は戦後まもなくのころ、学校を出た。教員養成の大学だったからか、就職の心配はなかった。しかし、少し変わったものが、一般企業へ就職したいと考えて真剣に準備していた。それをわれわれ教職組はいくらか冷やかな目で眺めていた。

そのころ、学生にもっとも人気のあったのは石炭会社で、三井鉱山はそのなかでも人気が高かった。石炭が「黒いダイヤ」といわれ、花形産業だった。若い社員が\* 札ピラを切って接待で豪遊をするという噂が学生たちを刺激していたようである。

ほかでは、\* 紡績、製紙、製糖会社が超優良会社だった。いずれも、色の白いものをこしらえるので、「三白」と呼ばれた。私の出た学校のように教職専門のところは、黒ダイヤや三白はとても無理であった。石炭会社などへ入社できた学生はおそらく皆無だったであろう。一般学生に人気のないところへ入った。

三十年すると、世の中はすっかり変わった。<sup>④</sup> 黒いダイヤは、黒い土くれみたいになった。エネルギーの主役を石油に譲らなくてはならなくなり、どの石炭会社も経営の危機に怯えなくてはならなくなった。若いとき札ピラを切って羽振りがよかったひとが、部長や役員になったはいいが、銀行へ行って頭を下げて融資を頼むという仕事に忙しかった。

よい会社へ入れなかったため、しかたなく人気のないところへ入社したひとたちは、ほぼ逆のコースを辿った。私の友人は、中堅証券会社に就職した。本人はそれを恥じてか、就職を隠し、「遊

んでいる」などとごまかしていた。ところが十年すると支店長になった。そこで初めて、「昔の友達に **A** 向けができた」と言った。

もうひとりの友人はもつと苦勞した。卒業とともに入社した中小企業がつぶれてしまった。失業。中途採用をしてくれるところがないかさがしたが、それすらなく、この男は、思い切ってスーパールの入社試験を受けた。そのスーパールは初めて大学卒を採用することにした年で、この友人は採用された。そのころはまだスーパールということばがちらほらきかれるようになったばかりだったからだが、卒業後すぐのクラス会でもスーパールの社員になったと言っているのが恥ずかかったそうである。

しかし二十年してみると、彼は幹部になっていた。スーパールは花形産業になっていたので、クラス会でも大きな **A** ができた。この友人は、午前六時ぐらいの太陽に、自分の人生を懸けたのである。陽は昇って十時ごろには、さんさんと輝く企業にいらっているという誇りをもつことができた。

私は愛知県は刈谷の中学を出た。トヨタの本拠地である。トヨタの煙突からのぼる煙を学校のグラウンドから見ても過ぎた。トヨタの社員の息子がクラスに何人もいた。

学校を卒業すると、多くのものがトヨタへ入社した。直接ではなく高等工業を出てから入ったものもすくなくない。

トヨタはもともと紡績会社と織機の会社で、豊田自動織機が中核会社で、われわれの同級生がかなりいた。

このころ、そのトヨタが自動車部門を独立させることになった。社員を折半し、自動車部門は山の奥に近い\*拳母に新工場をつくってスタートすることになった。

社員の振り分けをどうするかが難しい問題だった。当時の最高幹部がおもしろいひとで、社員の振り分けに変わった手を考えた。

同じクラスだった社員で二名のペアをつくらせる。そこで、<sup>⑤</sup>ふたりでじゃんけんをする。勝った方が、本社に残るか、自動車会社へ行くかをきめる。負けた方は勝ったひとのとならなかった方でも働く——こういう仕組みだった。社員もおもしろがって賛成した。

刈谷はひらけている。拳母はそれほどではない。交通もやや不便。なにより先のわからない新部門より実績のある本社の方がいいにきまっている。

じゃんけんの結果、勝ったものは例外なく本社勤務を希望したそうである。私の親しい友人もじやんけんに勝った組で、刈谷勤務になった。

やはり刈谷の方でよかったと思っただのは、ほんの十年。十数年もすると自動車部門の方が給料もよくなり、ボーナスも多くなる。刈谷との差はだんだん広がるばかり。

本人は苦笑いしながら、

「おれはいい。自分で選んだんだから、仕方がない。でも、女房にようぼうは違ちがう。どうして勝ったのに、拳母へ行かなかったのですか……、一生で、どれくらい差がつくかしれませんか、そう言うんだ。参るよ、何度もやられて、うんざりだよ」

傍かたわらできいていた仲間が言った。

「X、っていうことだな」

(外山滋比古『失敗談』)

\* 札ビラを切って …… 人に見せつけるように気前よく大金を使って。

紡績 …… 糸を作る産業。

織機 …… 糸を織物におりあげる機械。

拳母 …… 愛知県の地名。現在の豊田市。

問一 — 部① 「お祭りのようになる」とありますが、それはどのような状態をいうのですか。  
説明しなさい。

問二 — 部② 「真昼の太陽」・③ 「午前十時ごろの太陽」とはどのような会社のことを言い

表したものでですか。②は本文中から四字でぬき出し、③は十五字以内で説明しなさい。

問三 — 部④ 「黒いダイヤは、黒い土くれみたいになった」とありますが、これはどういふことを例えたものでですか。説明しなさい。

問四  にあてはまる体の一部を漢字で答えなさい。

問五 — 部⑤ 「ふたりでじゃんけんをする」とありますが、なぜトヨタはそのような方法で振り分けようとしたと考えられますか。説明しなさい。

問六  にあてはまることわざを、文章全体をふまえて答えなさい。

② 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

給油先探しにまごつくことが増えた。当てにしていたスタンドへ行ってみると閉店の貼り紙が。高速道路で「次の給油所は150キロ先です」という掲示を見て慌てたこともある。

石油流通に詳しい東洋大の小畠正稔教授(59)によると、国内のガソリンスタンドはこの①|半世紀で実に半減した。最盛期の1994年には6万軒を超えていたのが、いまや3万軒に。廃業|は年に1千軒のペースに達したというから驚く。

「マイカー離れでガソリン需要が落ち込んだ。老朽化した地下タンクの改修が義務づけられて、経営を断念する人が増えました」。今後、電気自動車(EV)やハイブリッド車(HV)が普及す

れば、従来通りのガソリン頼みの商法では立ちゆかなくなると指摘する。

かつてスタンドは各国の若者があこがれる最先端の職業だった、と教授は言う。1964年公開の仏映画「シエルプールの雨傘」でも、別れの哀しみが港町の給油所を舞台に描かれる。「日本で給油所が急増したのも同じ60年代でした」

震災のたび、スタンドには長蛇の列ができる。飲料や食料と同じように燃料を確保できないとだれしも不安になる。「4時間も行列して給油した」「いまでも燃料計が半分を指すと怖くなる」。緊急時はもちろん、平常時の暮らしも給油所に支えられている。

離島や山間部では近年、給油拠点をどう維持するか試行錯誤が続く。「津々浦々にあつて当たり前」という②長年のガソリンスタンド観が揺さぶられる時代である。

(朝日新聞「天声人語」平成三十年十月七日)

問一 ― 部① 「四半世紀」とありますが、何年間を表す言葉ですか。

問二 ― 部② 「長年のガソリンスタンド観が揺さぶられる時代」とありますが、筆者は現在をどういう時代と考えていますか。「ガソリンスタンド観が揺さぶられる」とはどういうことを明らかにして説明しなさい。

☐ 次の二つの条件を満たして、「これからの職業選択をどのようにすべきか」について、自分の考えを百字〜百五十字で書きなさい。

条件 ・ ☐と☐の二つの問題文の内容に関連させること。  
・ 「見通し」「多様性」という語を必ず用いること。

〈問題はこれで終わりです〉



受験番号

学校名

小学校

氏名

○

○

点線より下には何も記入しないこと。《成績集計欄》

一

問一

問二

②

③

問三

問四

問五

問六

二

問一

問二

三


# 国語A T

## 【計63点】

問一 就職試験において、先の見通しも考えずに、その場の勢いだけで採用の決定をしてしまうこと。

(10点)

問二 ② 花形産業(7点)

(10点)

③ 今後の成長が期待される会社。

問三 高い価値のあった石炭が、石油の登場により、以前の価値がなくなってしまうこと。

(10点)

問四 顔

(6点)

問五 これからどちらが伸びるのかわからない中で、本社に残るのか、新しい自動車会社を選ぶのか、その判断を運の要素が強い方法で、本人が責任を持つ形で選ばせようと考えたから。

(12点)

問六 負けるが勝ち

(8点)

## 【計17点】

問一 二十五年間

(5点)

問二 ガソリンスタンドは、一方で必要不可欠なものでありながら、一方では時代の変遷とともに需要がなくなってしまう状況にあるということ。

(12点)

## 【計20点】

省略